学位被授与者氏名	森　京花（もり　きょうか）
論文題目	化粧行為によってもたらされる ASD 女性の生きづらさに関する調査研究 ―化粧意識構築プロセスへの着目―
論文審査結果の要旨	本修士論文における評価としては、以下の 4 点に整理することができる。 １．　調査内容と構成について 論文は、従来の先行研究や概念定義、倫理的配慮から始まり、プレ調査と本調査という順序で実施された調査内容がしっかりと記述されている。プレ調査の統計分析と本調査のインタビュー分析の順番については、逆の流れでも良かったのでは無いかという議論の余地はあるかもしれないが、実際の調査実施順に基づいた記述であるため、現状の構成には十分な合理性が認められる。 ２．　対象者の分類と分析手法について インタビュー調査において、対象となった ASD 女性を「A グループ（化粧をしないことで自己実現を目指す女性）」、「B グループ（化粧をすることで自己実現を目指す女性）」、「C グループ（化粧が社会適応上の負担となり、自己実現が阻害されている女性）」の三つに分類し、その背景や化粧意識の形成に関する違いを詳細に分析することができている。一般的な女性においても化粧行為が多様な側面を持つことは広く認識されている中、ASD 女性の固有の経験に焦点を当てた点は、非常に独創的かつ意義深いアプローチだと評価できる。 ３．　社会的カモフラージュと自己実現の問題提起 本研究は、化粧行為が単に自己実現や社会参加の手段と捉えられるだけではなく、時には社会的カモフラージュとして機能し、さらにはストレスや負担要因となっている可能性を明らかにした。特に、C グループにおいては、周囲からは適切な社会適応として内外差異が見受けられる一方、本人にとっては自己実現を阻害する状況にある点が特徴的である。この点は、「自己実現」と「社会参加」の概念を更に掘り下げ、過去の否定的な経験だけでなく未来への希望や展望といった側面との整合性についても今後の論議の余地があると考えられる。 ４．　文献精読と研究の開拓性 多くの関連文献を適切に読破し、学術的視点と現場の実情を融合する姿勢は大いに評価に値する。特に、ASD 女性の支援という社会福祉学領域における開拓的な試みは、今後のさらなる研究・実践の発展に資するものと判断できる。 以上の点を総合すると、本論文は非常に良くまとめられており、修士論文として合格レベルと認められる。特に、ASD 女性が化粧に対して抱える複雑な心理や社会的背景を明らかにするとともに、支援策の必要性を具体的に提起できた点は、今後の社会福祉の発展に寄与する可能性を秘めていると評価できる。 本研究で示された結果から、化粧行為を通じた ASD 女性の自己実現と社会適応の問題は、多くの女性に共通する側面も含みつつ、特有の支援が必要であることを示唆している。今後は、自己実現の概念をより検討し、支

	援策や実効性のあるプログラムの開発を進めるような研究に取り組むことが期待される。 　2025 年 2 月 6 日に、北九州市立大学北方キャンパス本館 B-303 教室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士(人間関係学)として十分な内容であると判定した。